

## 胃瘻造設前後における患者家族の心理行動変化の一例

第4病棟

○葛野 華子 平野 和美 倉知佐代子  
和泉美知子 武智 敦子 森 徳美  
梨本 公子 木村 理恵 中村恵津子  
児玉 志野

### 【はじめに】

当病棟には神経難病の患者様が多く入院され、胃瘻栄養を行っている患者様が29名療養されている。胃瘻について、患者・家族の思いを中心に胃瘻造設を進めてから、受容することができるまでの心理変化を理解し、必要な援助を行い、胃瘻造設前後の心理変化と行動変容を理解するため研究を行った。

研究期間

2008年1月から9月

事例紹介

A様 68歳 女性

病名：進行性核上性麻痺

### 【経過】

2007年1月頃より嚥下困難進行し胃瘻造設を勧めたが、家族から胃瘻への抵抗感があり、同意が得られなかった。家族の思いを尊重し食事形態の変更は行わず、看護師・介護員との連携を取り、時間をかけて食事・水分摂取介助を行った。毎週末は外泊され、帰院しては発熱を繰り返していたが、家族の患者に対する思いを尊重し、信頼関係構築に努めていった。むせ込み・誤嚥性肺炎による発熱を反復したために、2008年1月家族の同意を得て胃瘻造設を実施した。造設後胃瘻からの確実な与薬・水分投与により、嚥下状態の改善・手足の動きや、胃瘻造設前に実施していた、排尿間隔延長による導尿施行がなくなり、定期的に自排尿があり家族から「造ったから良くなったんだね」等の発言が少しずつ聞かれるようになった。

外出について、夫の腰痛による移動介助の不安や、誤嚥時の対処への不安の言動が聞かれ、看護師2名・介護員1名が外出時同行し、6月実施した。

自宅では、院内では見られない表情・歌を口ずさむ・自力歩行がみられ、自宅に戻った安堵感が感じられ、家族も喜んでいる様子が伺えた。今後の外出・外泊に向け疑問・質問への対応、胃瘻手技の援助を、夫・娘に実施していった。

指導開始時、夫は薬注入のカテーテルチップを「注射器みたいで…怖いなあ」と、触ろうとしない場面もあったが、パンフレットを用いて説明し手技を見せ、強制せず時間をかけて、技術取得に向けた援助を行った。次第に「何だ、これなら出来るかな」との発言があり、積極的に薬・水分注入を行う姿が見られるようになった。

夫から「お盆に外泊したい」と申し出があり、2度目の外出は家族のみで行った。

現在面会時には、今回の外出に向け手技の練習を行っている。

### 【結 論】

胃瘻造設は当病棟においても、積極的に用いられている。取り扱いの簡便性や経済性に優れていること、管理が簡単な上に栄養効果が高いことが認識されている。

しかし、医療者の認識は高まっているが、患者家族は自分の家族に胃瘻が必要となった場合、ボディイメージの変化、経口摂取出来なくなるのかと言う喪失感を理解することは容易ではない。

本事例は、胃瘻造設に対する嫌悪感が強くインフォームド・コンセントから造設まで約1年半要した。

家族は、胃瘻造設施行前後に、造設に対する抵抗感、認知不足による不安があった。

家族の言動を受け止めながら、チーム内で情報交換を共有し統一した指導、実践することで、胃瘻に対する不安が軽減されていった。家族が、胃瘻手技を習得できるよう援助ことにより、家族だけの外出を可能にすることが出来た。

## 【結 果】

家族の「胃瘻をつくって良かった」と言う言葉からも、胃瘻造設を受容出来たと考える。

## 【参考文献】

- ①渡辺裕子著 家族看護：理論と実績  
第3版 日本看護協会出版  
2006年
- ②家族看護特集 家族の力を支える看護  
2007年9月号

---

### 裁判員制度について ～職員が裁判員として 参加する場合の職場の対応～

財務管理課

○金子 一広 甲田 智子 中田千恵美  
藪内 寿子 千葉真由美

---

## 【はじめに】

裁判員制度が、平成21年5月21日にスタートします。この制度は、国民の皆さんに裁判員として刑事裁判に参加してもらい、被告人が有罪かどうか、有罪の場合どのような刑にするかを裁判官と一緒に決めてもらう「国民の司法参加」を実現する制度です。

すでに平成21年11月より、裁判員候補者名簿作成のため、候補者に対して最高裁判所より通知・調査表を送付しているようです。「通知」とは、裁判員候補者名簿に記載されたことの通知、「調査表」とは、必要事項を記入し返送して、候補者となることの是非を確認するものです。

制度はすでに始まっています。

裁判員制度はなぜ導入されたのか、裁判員はどのようにして選ばれるのか、制度の理解を深め、裁判員として従業員が参加する場合の職場の対応を検討します。

## 【裁判員制度の仕組み】

裁判員制度は、国民から選ばれる裁判員が、刑事裁判に参加する制度です。6人の裁判員と3人の裁判官が、ともに刑事裁判に立会い、被告人が有罪か無罪か、有罪の場合どのような刑にするかを判断します。

## 【裁判員の選られ方】

各地方裁判所ごとに、管内の市町村の選挙管理委員会がくじで選んで作成した名簿をもとに、裁判員候補者名簿を作成します。候補者へは候補者であることを通知・調査表を送付します。次に、事件ごとにくじで裁判員候補者が選ばれます。通常1件あたり50人から100人程度となります。その中から裁判員を選ぶための手続きが行われます。最終的にその事件の裁判員6人がくじで選ばれます。

通常の事件であれば、午前中に選任手続を終了し、午後から審理を開始します。選ばれなかった人は、ここですべての手続が終了となります。

## 【裁判員制度の導入】

国民のみなさんが裁判に参加することによって、国民の皆さんの視点、感覚が裁判の内容に反映されることになります。その結果、裁判が身近になり、国民の皆さんの司法に対する理解と信頼が深まることが期待されます。国民が裁判に参加する制度は、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・イタリア等世界の国々で広く行われています。

## 【裁判員はどのようなことをするか】

裁判員に選ばれたら、裁判官と一緒に刑事事件の審理(公判)に出席します。公判は出来る限り連続して開かれます。裁判にかかる日数は三日以内が約70%と言われています。証拠に基づいて、被告人が有罪か無罪か、有罪だとしたらどんな刑にするべきかを、裁判官と一緒に議論し(評議)決定する(評決)ことになります。評決内容が決まると、法廷で裁判長が判決の宣告を